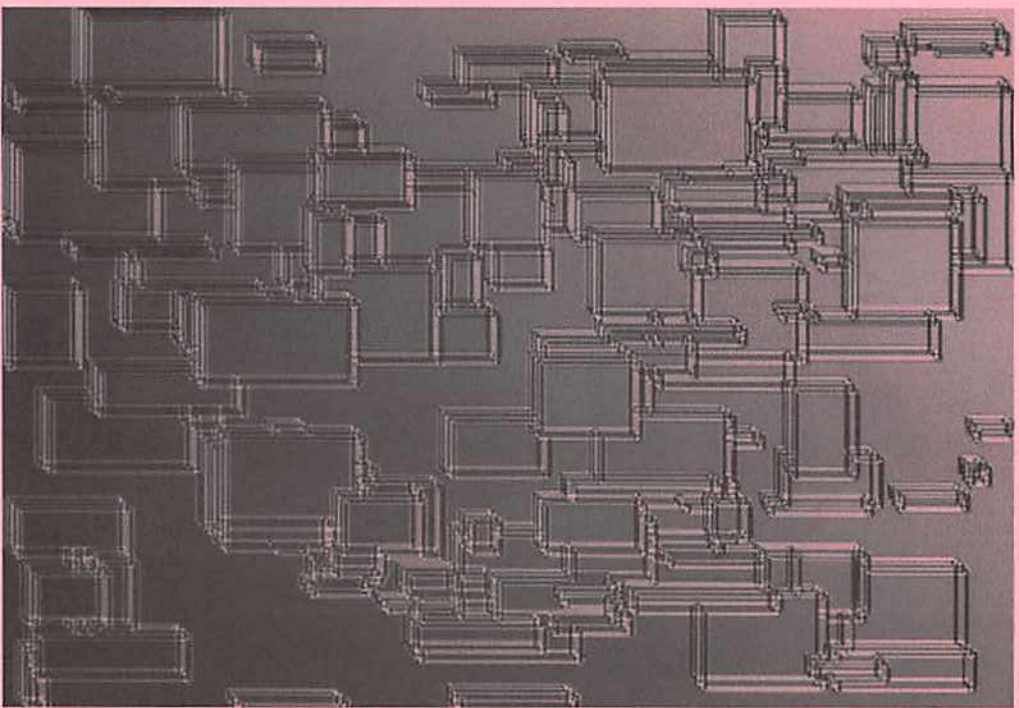


よみ・かき・ことば集^{しゅう} (二)

わたしのおかねなのに

よしだかずこ
吉田一子



わたしのおかねなのに

よしだ かずこ

吉田 一子

おとどし 一九九三せんきゆうひやくきゆうじゅうさんねん 四月しがつ 二十日はつか

の あさ です。「きようは ぎんこうへ 行って、
おかねを おろして こなくては」と、おもいまし
た。こうせいねんきんが 三まん五せんさんごえん はい
っている はず です。そこから 三まんえんさん だ
け おろしたいと おもいました。

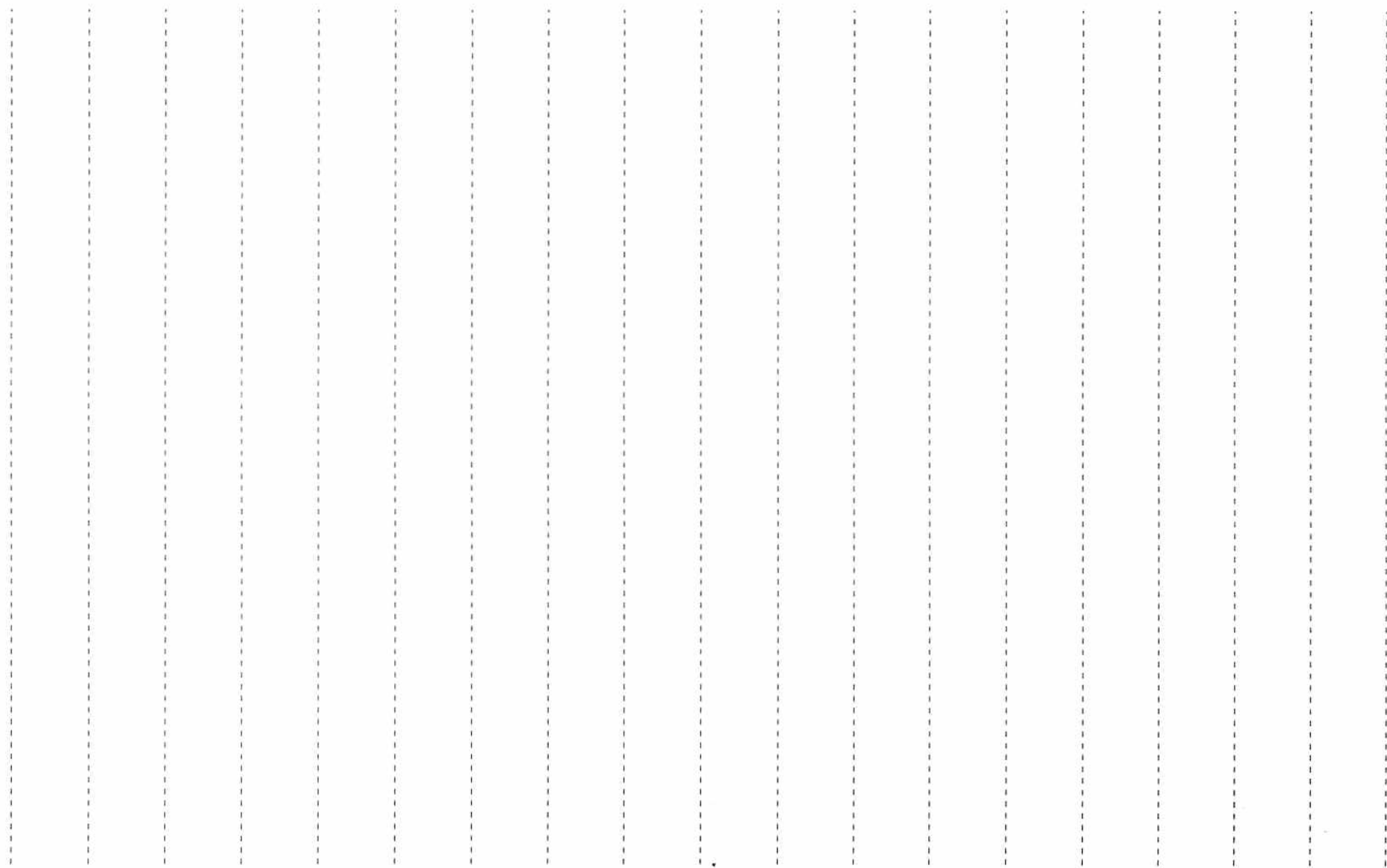
そこへ きんじよに すんでいる むすめの
順子じゅんこが やって きました。これ さいわいと、い
つものように 順子じゅんこに たのみました。

「きよう ぎんこうへ いくから、また かみに
かいて。」

「なんぼ だすんや。」

「三まんえんさん。」

「もう、いつも あさばつかりに いうて。いそが
しいのに。」



おこりながらも 順子じゅんこは かいて くれました。
それを もつて、えきまえの ぎんこうにいきました。まどぐちには わかい おんなのひとが すわって いました。

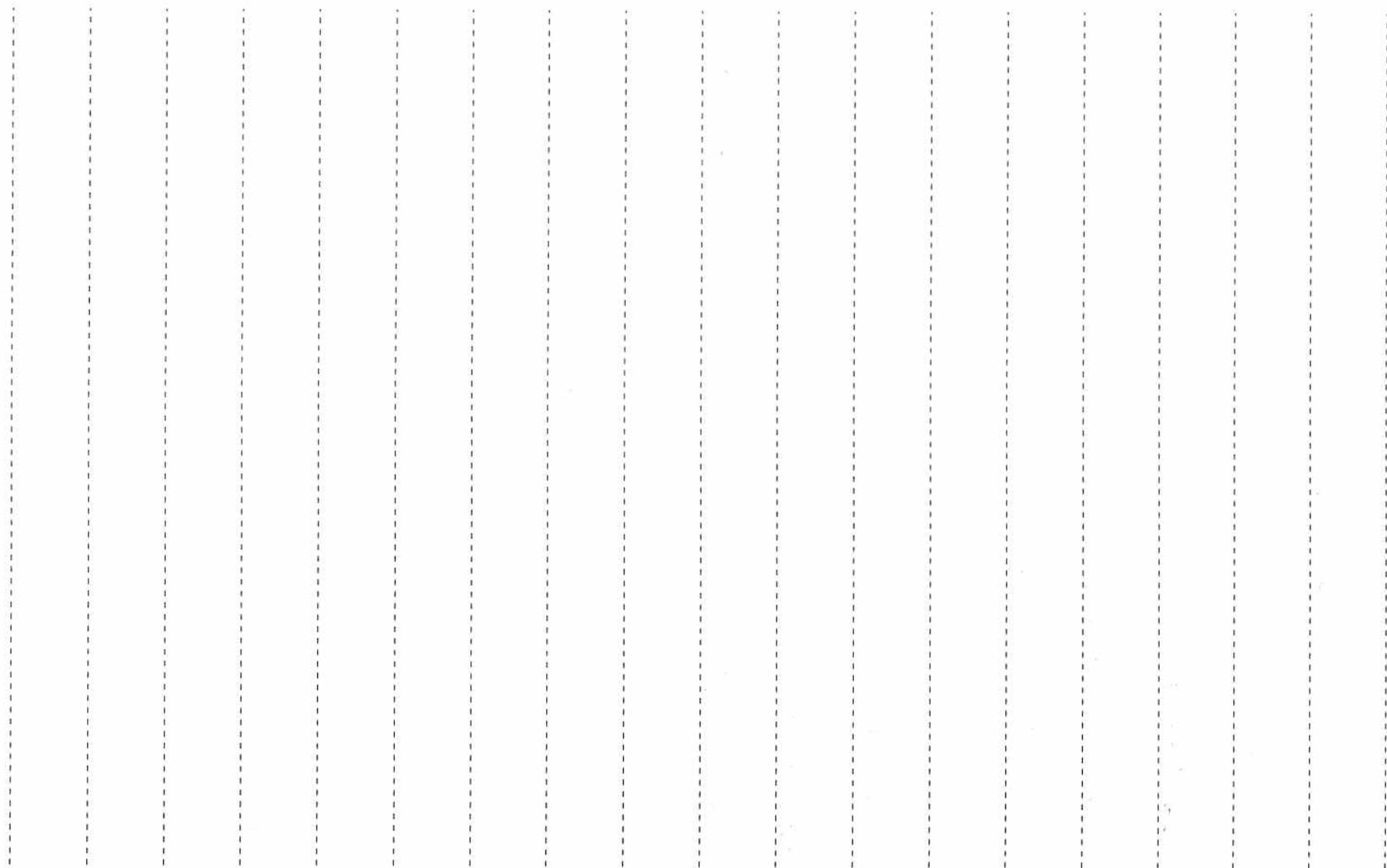
「おねがい します。」

と いった、かみと つうちようを わたしました。
すると、その おんなのひとは、ちよつと かみをみて、まえの ほうを ゆびさしながら、

「あそこに かみが ありますから、もういちど かいてください。」

と、かみを かえて きました。きんがくの ところの 0ゼロが ニじゅうにになっっているから、おかねを だせないというのです。

わたしは あわてました。わたしは うまれてから このかた、じぶんの なまえを かいて、ひとさまに さしだしたこと など ただの いちども ありません。しきじがつきゆうで 吉田よしたかずこ一子と なんども べんきようは してきた けれど、ぎん



この かみに かくような じしんは まるでないのでした。そこで おろおろしながら、そのおんなのひとに、

「わたし、じい よう かかんから、あんた ちよつと かい て ちょうだい。」

と たのみました。けれども、おんなのひとは、

「だめ です。じぶんで かかなくては。」

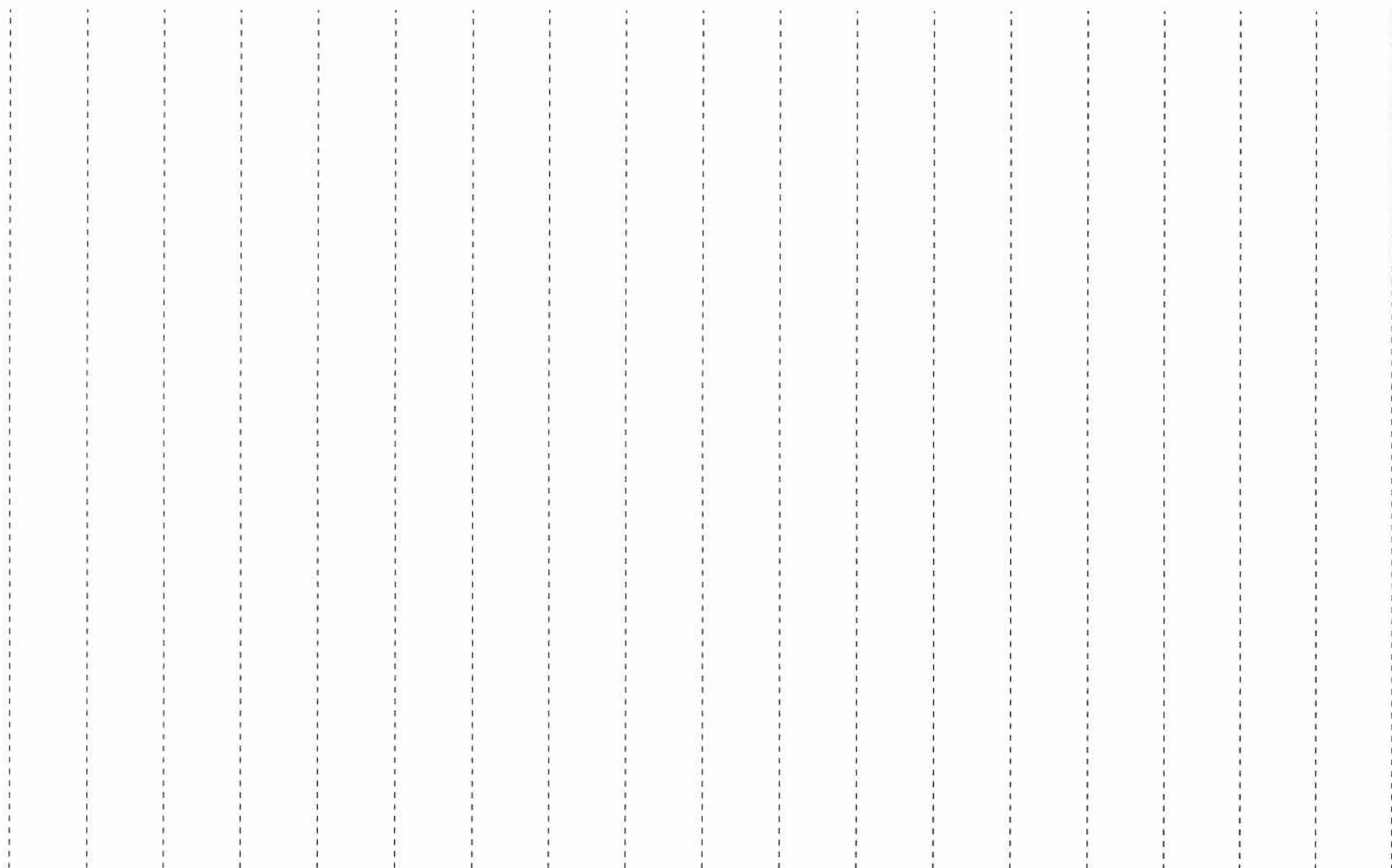
と いった、かい て くれません。わたしはもう一ど、

「わたし、じい しらんから、これ、むすめにかいて もろたんや。せやから、あんた、すまんけど かい て ちょうだい。」

と、いっしょうけんめい たのみました。それでも その おんなのひとは、

「だめ です。じぶんで かかなくては。」
と いう ばかりです。

わたしは しかたがないので つうちょうを ひったくつて かえろうと しましたが、もうひと



り おんなのひとが いたので もう一かい た
のんで みました。でも、そのひとも、いうことは
おなじでした。

わたしは おもわず ぼやいて しまいました。

「じい しらんもんは じぶんの おかねも だ
されへんのんか。」

くやしいやら、つらいやら、とても なさけない
おもいで かえって ききました。

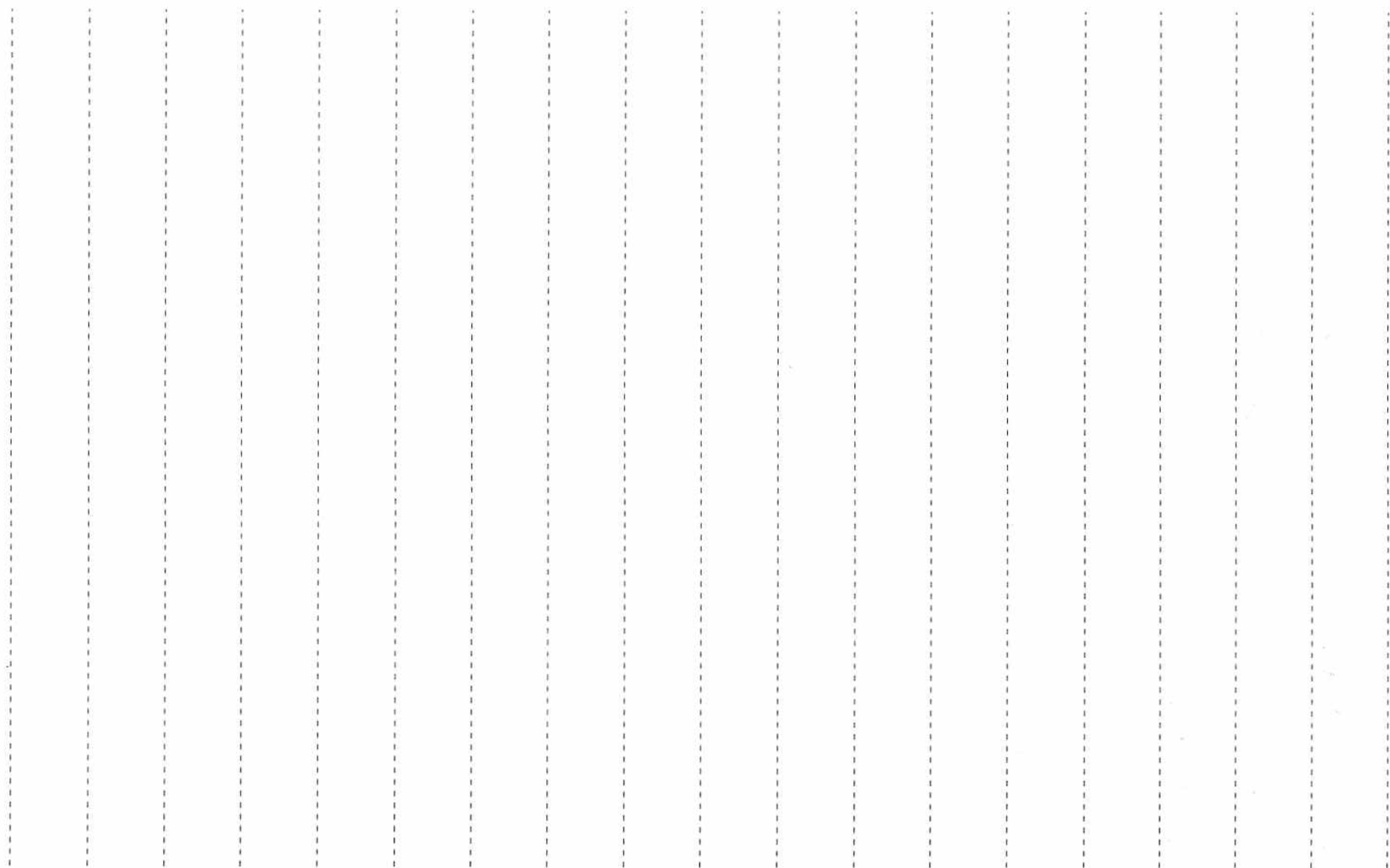
その日の ゆうがた、順子じゅんこの いえに 行って、
あさの ことを はなしました。そして、

「おまえが、ちゃんと かいて くれへんかったか
ら、おかね だされへんかった。」と、おこりまし
た。

すると 順子じゅんこは、「いまから ぎんこうに でん
わ したる。」

と 行って、でんわを かけて くれました。

「もし もし。」



どうやら おとこのひとが でてきた ようです。でんわの そばに いたから、ぎんこうの ひとの こえも よく きこえました。順子^{じゅんこ}は、わたしが はなしたことを 言ってから、

「じい かかれへん もんは、じぶんの おかねも だされへんのですか。」

と、おこりました。

ぎんこうの ひとが、

「いくら だしに こられたんですか。」

と、ききました。順子^{じゅんこ}が また きつい こえで、

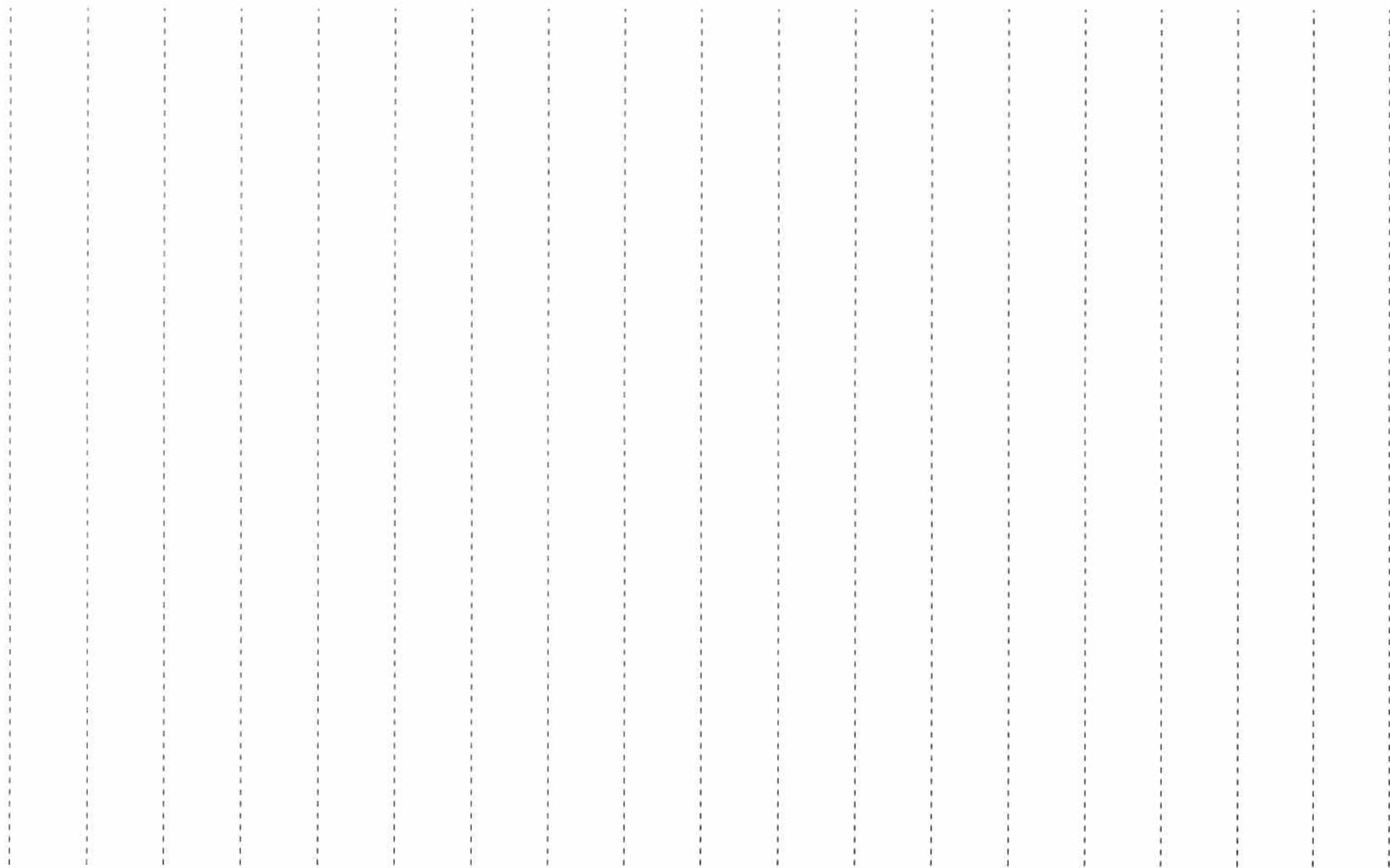
「そんな もんだいでは ないでしょ。おおきな きんがくなら かいてくれて、ちいさな きんがくなら、かいてくれないのですか。」

「もし、ての ふじゆうな しんたいしょうがいしやが こられたら、どうするんですか。」

と、いいました。

ぎんこうの ひとは、

「きほんてき には・・・」



「きほんてき には・・・」

と、おなじことを なんども くりかえし いています。

順子^{じゅんこ}は、たまりかねたように、

「この よのなか、じい かける ひと ばかり
と ちがうでしょ。おたく みたいな ぎんこうな
ら、よけいに じんけんがくしゅう していると
おもってましたわ。」

と、いいました。

この やりとりを きいていて、わたしは もう
なさけなくて なさけなくて、

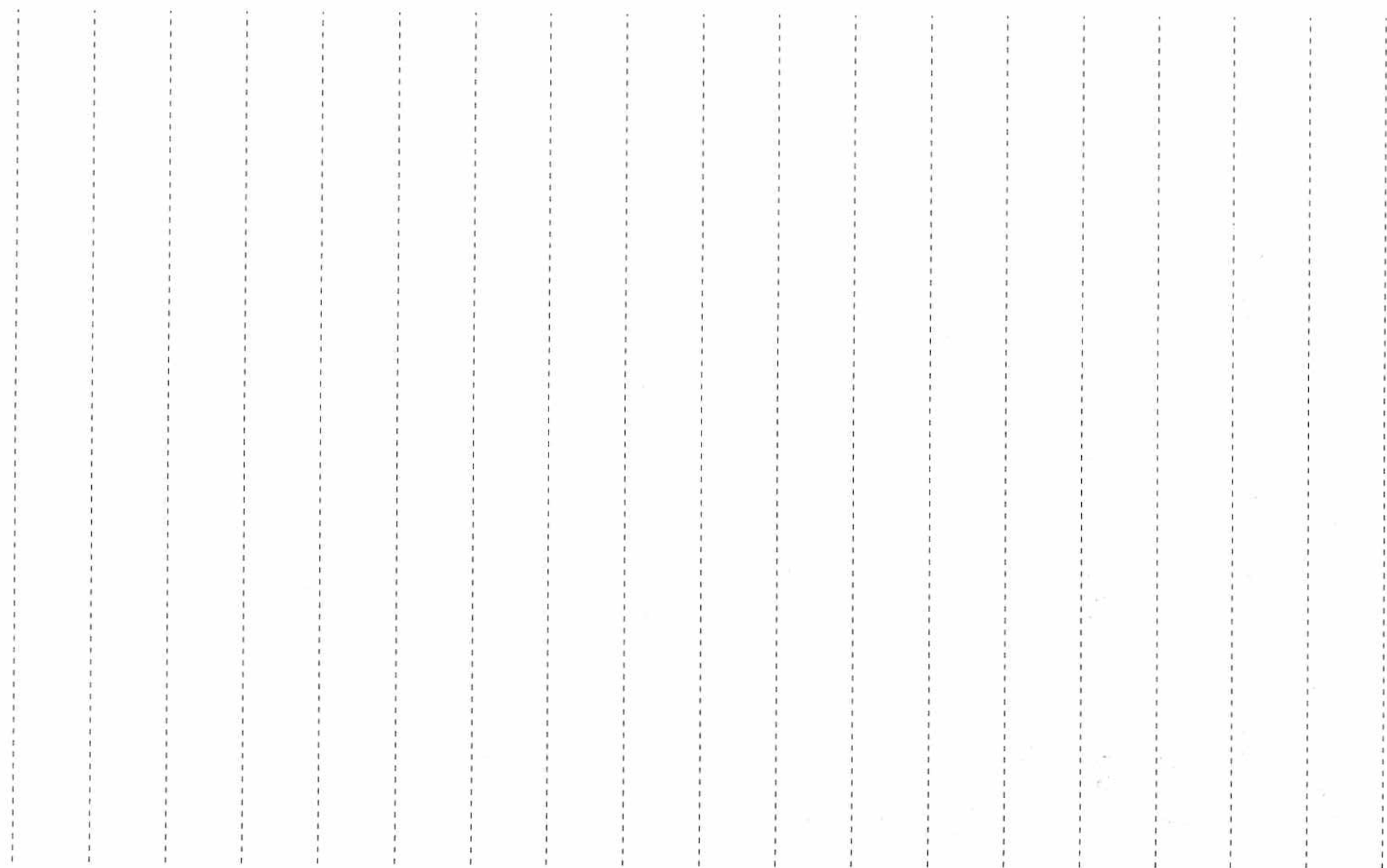
「もう いい。もう いいで、順^{じゅん}ちゃん。」

と いて、とめました。

順子^{じゅんこ}は、

「しきじへ 三^{さん}ねんも いてて、ところも なま
えも かけんで どうすんの。ほんまに くやしい
めに あわんと、ほんきに なれへんのやから。」

と、こんどは わたしに おこります。



それから わたしは むらの ふろに いき、か
えりに また 順子じゅんこの いえに よりました。そし
たら、むこが かえっていて、

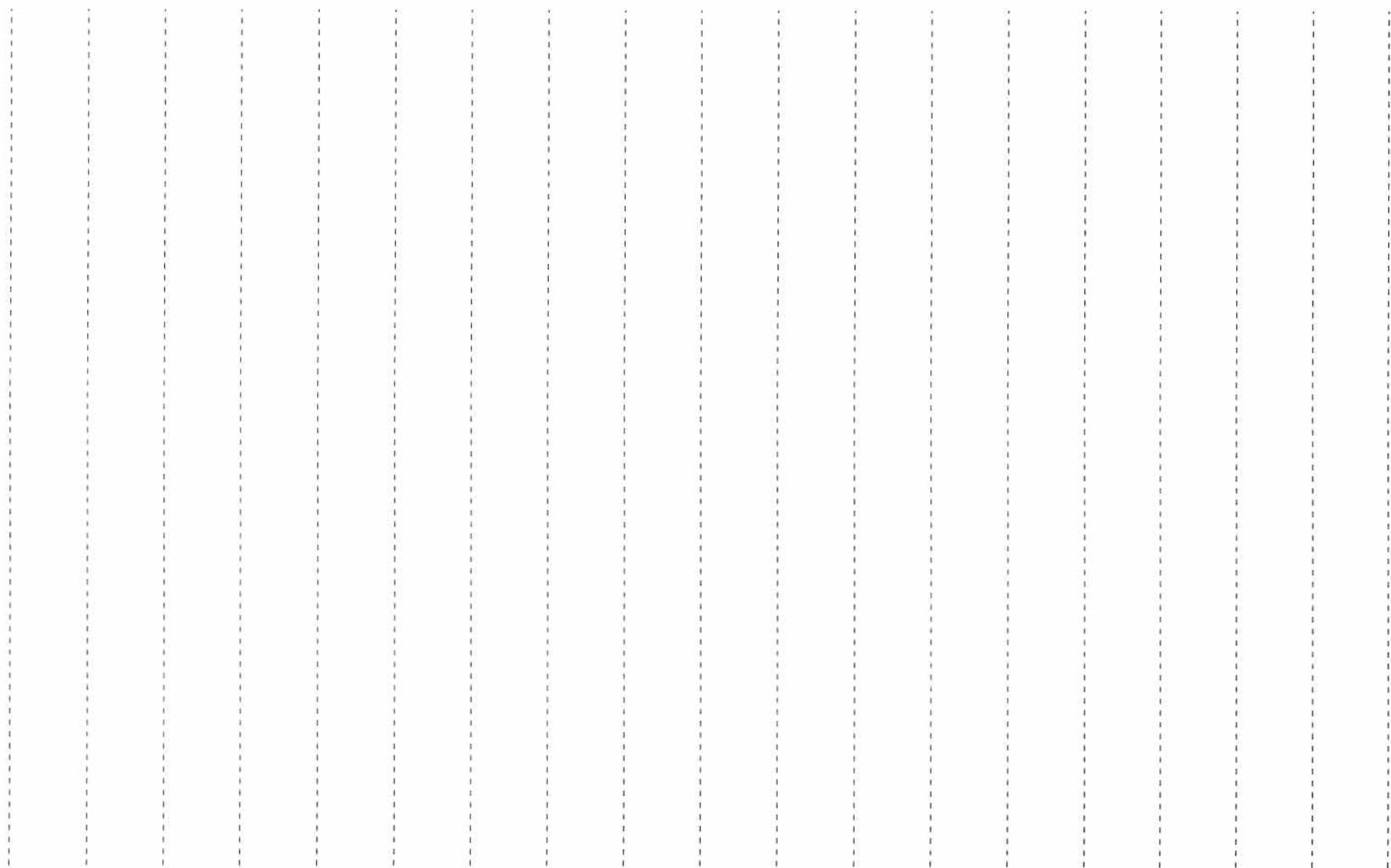
「おかあちゃん、ぎんこうから でんわ かって
きたで。なにか あったんか。」

と、ききました。ぎんこうの ひとも、やっぱり し
んぱいして くらえているのだなと おもいました。

じを なんにも しらなかった ときは、

「ああ、そんな もんか」と、あきらめて いまし
たが、しきじで すこし ひらがなだけでも よみ
かきが できるようになった いまは、くやしくて
くやしくて なりません。もつと もつと べんき
ょうして、なまえと、ところ ぐらいは、かんじで
かけるように なりたいと おもいました。

あくる日ひ、こんな おもいは もう したくない
と おもいながら、順子じゅんこと いっしょに、きのうの
ことを 日にきに かきました。



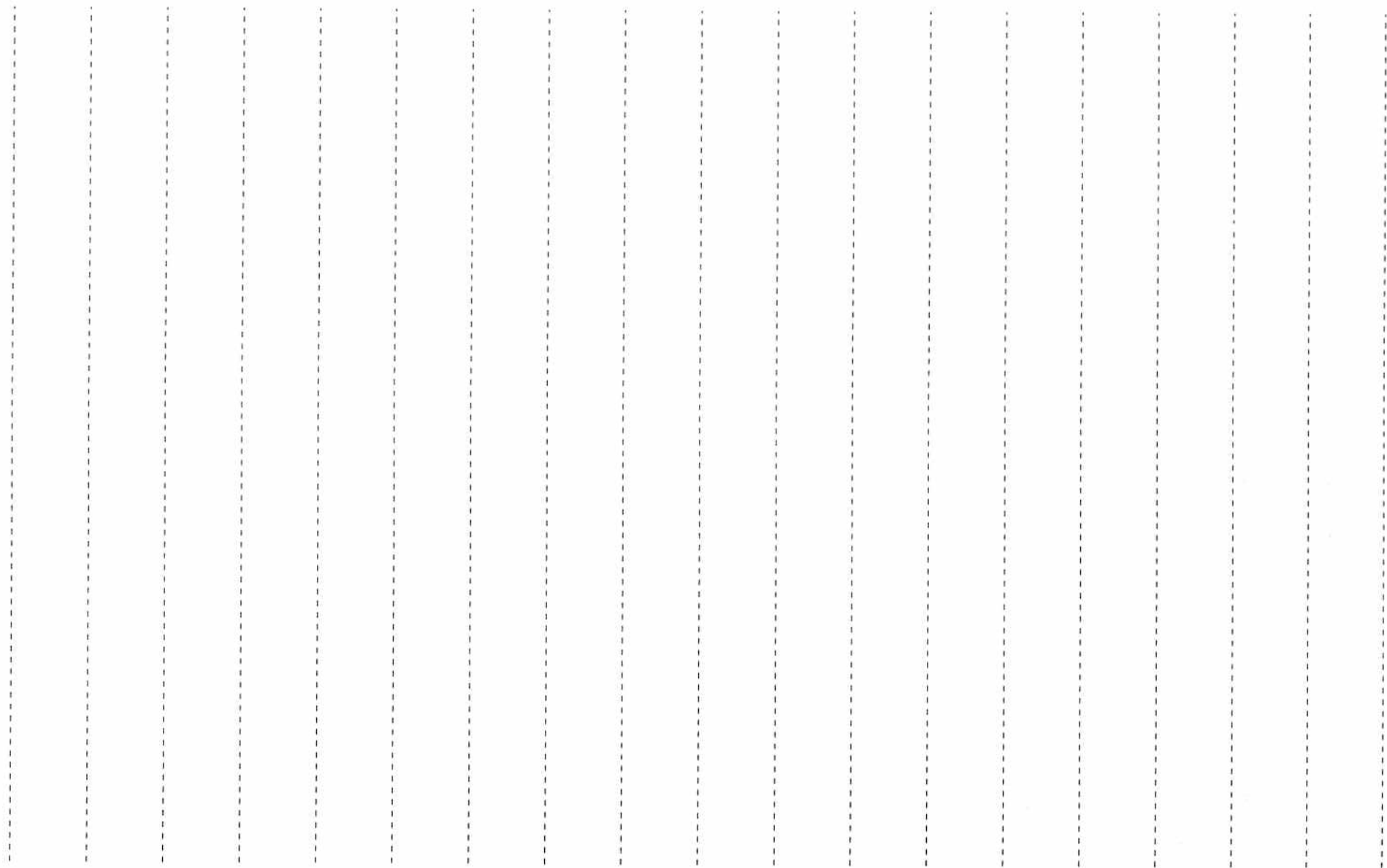
その つぎの 日は 木よう日で しきじがっきゅうの日^ひです。わたしは、この 日^{にっ}きをもつて、ところと なまえの てほんを かいて もらいました。

その日^ひから、なんども なんども けいこしました。えんぴつで おおきく かいたり、ちいさく かいたり、ボールペンで かいたり、もう なんかい かいたか わかりません。しきじがっきゅうへいくと、まつさきに これを けいこしました。それでも まだ ところが なかなか かけません。すぐつまって しまします。てほんを みないで かけるように まだまだ けいこしなくては なりません。

こうしの せんせいはい、

「この くやしさを、つらくても うんと くわしく かいて おきましょう。」

と いわれました。

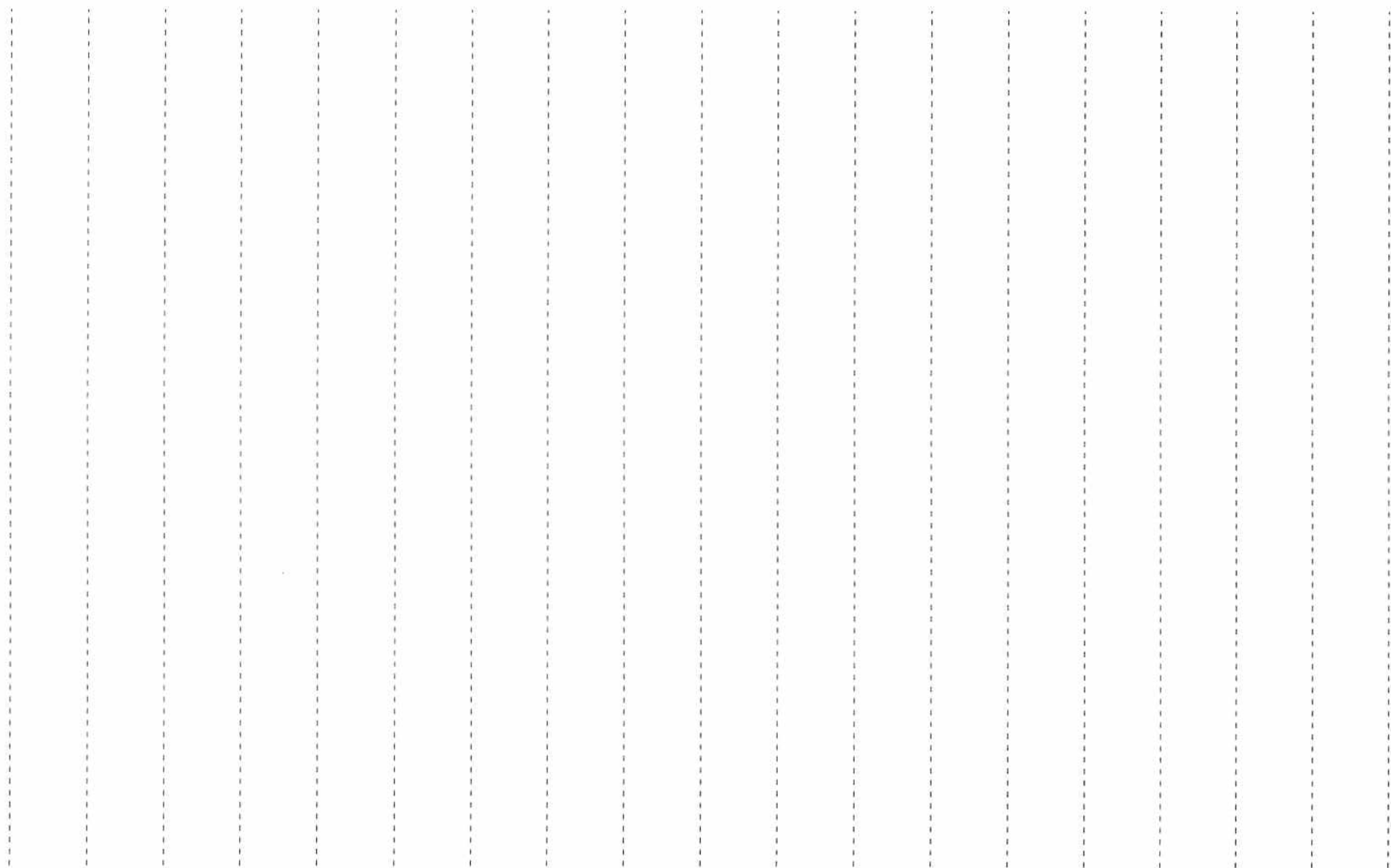


そこで また、順子^{じゅんこ}に はなしして、ちよつとくわしく かいて もらいました。それから、ひがしおおさかに いる 順子^{じゅんこ}の いもうとの 節子^{せつこ}にも はなしして、節子^{せつこ}にも かいて もらいました。日^にきよりは うんと ながく なりました。それを せんせいに みせると、せんせいは、「これを もとにして、もう一^{いち}ど ぼくと いっしょに かいて いきましよう。」と いわれました。そうして かきはじめてのがこの ぶんしょうです。

これを かく ときが、一^{いち}ばん たのしくなりました。

「このぶんしょうは、じぶん^{じぶん}で かみに なまえと きんがくを かいて、おかねが だせた 日^ひまで つづけましよう。その日^ひの ことを かいて、この ぶんしょうを おわりに しましよう。」

と、せんせいは なんども いわれます。わたしも、そうしたいと おもいました。



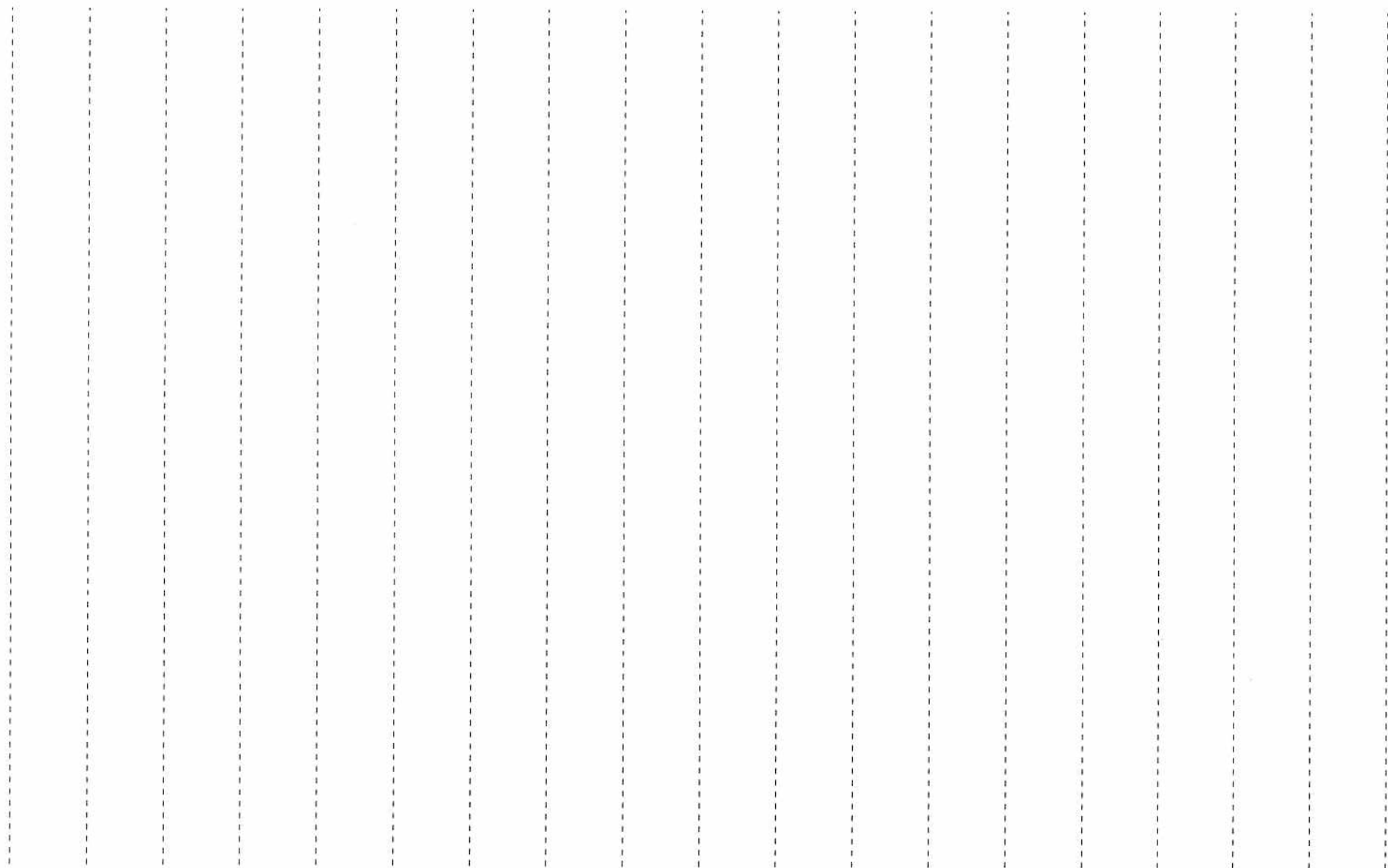
としが かわって 三月二日さんがつふつかの あき です。四月八日がつようかから 一しゅうかん、四しこくに おまいりに
いくので、十まんえんじゅう ださなければ なりませ
ん。

こんどこそ、じぶんで かみに かいて、ぎんこ
うで おかねを おろして こようと おもいま
した。

けれど、また 「まちがつてる」と いわれな
い か しんぱいです。それで やっぱり 順子じゅんこにも
かいて もらいました。もし、わたしの かいたの
で とおらなかつたら、順子じゅんこに かいて もらった
のを だそうと おもったのです。

一ねんいち かかって やつと ためた 十まんえんじゅう
んです。これで おろして もらえるやろか、しん
ぱい しながら、ボールペンに しっかり ちから
を こめて かきました。

それを もって、ぎんここの まどぐちにいき、
おそるおそる、



「きょう、はじめて かいて きたんやけど、これで いけますか。」

と いって、つうちようと わたしが かいた ほうの かみを さしだしました。

まどぐちの おんなのひとは、にっこり して、

「いけますよ。」

と、いって くれました。ほっと しましたが、まだ しんぱいです。

しばらく まえに たっていると、

「吉田^{よしだ}さん。」

と、よんで くれて、十^{じゅう}まんえんと いっしょに つうちょうを かえして くれました。

うまれて はじめて、わたしの かいた じで、おかねが だせたのです。うれしくて うれしくて、なみだが でてきました。

あくる日^ひの あき、順子^{じゅんこ}がきたので、

「きのう、わたしが かいた かみで、おかね だ



して きたで。」

と、はなしました。順子じゅんこは

「よかったなあ。」

と、よろこんで くれました。

その 日は、しきじがつきゅうの 日ひ でした。
みんなに、

「きのう、じぶんの じいで、おかね、おろしてき
たで。」

と、ほうこく しました。みんなが、

「よかったね。もう だいじようぶや。」

と、はげまして くれました。

これで、やっと この ぶんしょうを おわりに
する ことが できました。

せんきゅうひやくきゅうじゅうよ

(一九九四ねん 三月三十一日)

さんがつきんじゅういちにちに

※ 本書は、吉田一子さんの文集『なまえをかいだ』から「わたしの
おかね なのに」を掲載しました。吉田さんは、この作品などで、
一九九五年、第二十二回部落解放文学賞に入選されました。

わたしの おかね なのに

著 者 吉田一子

識字・日本語センター

〒五五六・〇〇二八

大阪市浪速区久保吉一・六・一二

大阪人権センター三階

電話・FAX 〇六（六五六二）九九八八

※ 本教材が必要な場合は、識字・日本語センターまでご
連絡ください。電話の受付は、平日の午後一時～五時で
す。送料を負担していただく場合があります。

※ 本書は、平成十三年度文部科学省委嘱「識字・日本語
読み書き学習における教材研究事業」の一環として、
大阪府教育委員会が発行しました。